

幼児の老人観 (1)

——特に祖母イメージについて——

吉村智恵子・望月久乃

Early Children's Image of Old Age (1)

——Especially Concerned with the Grandmother's Image——

Chieko YOSHIMURA and Hisano MOCHIZUKI

はじめに

老人観及び老人のイメージについての従来の研究は、その多くが青年を対象としている(安藤1974, 保坂ら1986・1988, 井上1980, 宮崎ら1976, 守屋1974)。保坂ら(1986)は、大学生が抱く老人のイメージは、対象者(大学生)の基本的属性(出身地, 性, 家族構成, 出生順位等)よりも、老人や老人問題への関心や祖父母との接触などの個人の経験に基づく要因の方が重要であることを示している。

また、児童を対象としたものでは、深谷ら(1982・1983)が、小学5年生を対象とした調査により得られた祖父母像を、因子分析により類型化しているものがある。そこでは、それらの型に祖父母の年齢や経済力が関連していること、男子より女子の方が老人を好意的にとらえている傾向があること、祖父母が遠隔地に住むほど子どもからはポジティブなイメージがもたれ、近くに住む(同居を含めて)ほど、ネガティブな見方がされていることが見出されている。

幼児を対象とした老人観や老人イメージの研究については、塚本(1978), 村井(1981)の報告が見られるが、祖父母に対する好き嫌いの感情とその理由を述べているのにとどまり、祖父母との関係については、詳細に分析されたものは見当たらない。

幼児期の老人観を明確にし、老人観を発達的に検討していくことは、世代間の人間関係がより一層複雑化しようとしている今後の高齢化社会において、重要であると考えられる。

そこで幼児の老人観を考えるにあたり、先行研究において、対象者と老人との関わり方が老人観に影響していると報告されていることから、本研究においては、第1の調査で、幼児と老人とのつながりと幼児の抱いている老人イメージとの関係についてとらえ、第2の調査で、幼児のもつ一般的な老人像についての基礎的資料を得ようとするものである。

調 査 I

目 的

幼児と老人とのつながりを明らかにし、幼児の抱いている老人イメージとの関係をとらえようとするときに問題となるのは、概念形成が未熟な幼児の意識を探る難しさである。そこで、

日常生活に根ざした具体的な事象として、幼児にとって最も身近な老人である祖父母と幼児自身との関係を取りあげることは、最も有効なことと考えられる。ここでは、予備調査より、幼児との関係が祖父よりも祖母の方がより密接であったことから、幼児とその祖母を対象として、幼児が祖母とどの程度接触しているか、また、祖母に対して、どのようなイメージを抱いているかを幼児の父母の調査結果から検討した。

方 法

アンケート調査方式で実施した。(各園の担任経由で配布・回収)

調査時期 1989年1月～8月

調査対象園 名古屋市私立K幼稚園 五歳児 198票配布
 〃 私立T保育園 四歳児 7票配布
 〃 〃 五歳児 19票配布
 〃 私立S保育園 四歳児 14票配布
 〃 〃 五歳児 13票配布
 合計 251票配布

調査項目 祖母自身に関する項目 4項目
 祖母に対する好嫌 1項目
 祖母との接触程度と接触に対する好嫌 9項目
 祖母のイメージ 9項目

*いずれも回答者(父母)が知覚した幼児と祖母との関係が回答となっている。

回収数 237票(回収率94.4%)

分析対象 幼児の祖母は、父方・母方合わせて2名であるが、この調査では「幼児と最も関係の深い人」1名とし、幼児と祖母とを対象とした回答を父母に求めた。回収した中から有効回答173票が分析の対象となった。その内訳を表1, 2, 3に示す。

表1 対象幼児の構成

年齢(歳)	男児	女児	計(名)
4	2	6	8
5	16	15	31
6	70	64	134
計	88	85	173

表2 対象祖母数

	祖母	人数(名)
同居	父方	14
	母方	3
別居	父方	43
	母方	113
計		173

表3 回答者数

回答者	人数(名)
父	2
母	166
不明	5
計	173

結果と考察

1. 別居祖母との接触

幼児と祖母との接触量をみるため、別居している祖母宅への訪問頻度・祖母との外出頻度・通話頻度を図1に、年間接触日数を表4に示す。祖母宅を訪問することと、祖母と電話で話すことは、「多い」が「少ない」よりも多かった。しかし、祖母からの訪問、あるいは家庭以外

幼児の老人観 (1)

での接触も含めた年間接触日数は、全体の69.9%が30日未満（内25.7%が10日未満）であり、どの程度の訪問日数を「多い」と感じて回答しているのか、個々に相違があるとみられ、さらに詳細な検討が必要と考えられる。また、祖母と一緒に外出することは、「少ない」とするものが多く、一緒に外出するという最も直接的な接触の仕方が、他の2つに比べて極めて少なくなっている。幼児と別居祖母の接触で、最も多いものは、電話を介した接触である。ここで重要なことは、幼児と別居祖母とのコミュニケーションの仕方としては、訪問や外出という身体的な接触によるものよりも、会話を通して接触しようとする傾向にあるということである。すなわち、別居している祖母は、幼児と接触する場合、同居している場合よりも物理的なデメリットがあり、電話という簡便な方法を使うことによって、接触量を補おうとしていると推察される。

表4 年間接触日数

日数	0～	10～	20～	30～	40～	50～	60～	70～	90～	100～	365	計
人数	40	39	30	16	10	4	3	0	5	5	4	156(名)
	25.7	25.0	19.2	10.2	6.4	2.6	1.9	0	3.2	3.2	2.6	100(%)

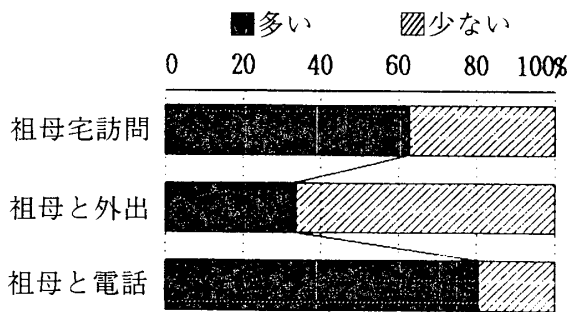


図1 別居祖母との接触頻度

祖母との接触についてはその接触を好んでいるかどうか、またどのような理由で接触を好むかも調査した。幼児の殆どは祖母宅を訪問すること、祖母と外出することなど、接触を持つことを好んでいた（訪問…96.5% 外出…91.3%）。

まず、祖母宅への訪問が「好き」な理由について検討してみたところ、大きく2つに分けられた。第1は、「祖母がやさしい」「遊んでくれる」など、祖母と一緒にいることが「好き」だからだという理由であった。

このことは、祖母自身と幼児自身とのつながりからくることを示している。第2の理由は、「祖母宅には自分の家にはない遊具や広い庭がある」「御馳走がでる」「従兄弟達と遊べる」など祖母自身だけでなく、その周りの環境に関係した理由であった。これら二つの理由を比較した結果、第1の理由を示したものが第2の理由を示したものよりも有意に多かった($\chi^2=6.6$ $df=1$ $p<.05$)。このことは、幼児が別居している祖母を訪問する際の動機づけとしては、物質的な要因（遊具・庭・御馳走など）や祖母に付随した要因（従兄弟たちなど）よりも、祖母自身の魅力や、祖母との接触を目的とした要因が重要であることを示すものである。これと同様のことだが、外出についてもいえた($\chi^2=48.2$ $df=1$ $p<.001$)。

以上のことから、幼児と別居祖母との接触量は多い方だと、幼児の父母は考えているといえる。また、幼児が別居祖母と接触を持つ場合、以前、接触時に祖母の働きかけ（話しかける、一緒に遊ぶ、出かける）をプラスとして受けとった経験が動機づけとなっている。このことは、幼児が祖母像を形成する際に祖母との接触経験が手掛かりとなっていることを示唆していると考えられるので、後（4. 祖母イメージと諸要因との関係）で検討したい。

2. 祖母のイメージ

祖母のイメージ9項目については、幼児を対象としているため、SD法は用いず、イメージを表す形容詞に対して、肯定的か否定的かを調べるため、「ぴったり」「まあそう思う」「あてはまらない」の3件法の質問を行った。

全体としては、比較的ポジティブなイメージが《やさしい・おもしろい・きれいな》の順に肯定されており、ネガティブなイメージが《くさい・きたない・くらい・つまらない・こわい・がんこな》の順に否定される傾向にあった。結果を表5に示す。

表5 祖母のイメージ

イメージ	肯定	やや肯定	否定	χ^2
きれいな	20	123	28	***
やさしい	88	83	2	***
おもしろい	28	116	29	***
がんこな	3	21	149	***
つまらない	1	7	165	***
こわい	3	17	153	***
くらい	0	5	168	***
くさい	0	1	172	***
きたない	0	1	172	***

*** p < 0.001

3. 祖母に対する好き嫌い

祖母を「好き」であるかという問いに対して、肯定するものが多かった($\chi^2=93.74$, $df=1$, $p<0.001$)。このことは、塚本(1978)の幼児・児童を対象とした調査結果と一致しており、上述したイメージの全体的な結果と考え合わせても、幼児は祖母に対してかなり好意的な態度をもっているといえる。

4. 祖母イメージと諸要因との関係

表6は、祖母のイメージと本研究で調べた要因との関係について、クロス集計した結果を示す。その中から、祖母イメージの全体像を表すために、同・別居別に図示したのが、図2である。

なお、全体で明らかに否定されたイメージ《くさい》《きたない》《くらい》については、表6では除外した。

その結果、祖母イメージと接触頻度の項目についてみると、年間の接触日数の違いでは、祖母イメージのどの項目においても、肯定、否定の差は見られなかった。次に、訪問の項目をみると、訪問の頻度が多くなると祖母イメージのポジティブな項目である《きれいな》を肯定し、ネガティブである項目の《がんこな》を否定するものが多かった。外出の項目との関係は、祖母との外出が多いものほど、ポジティブな項目の《やさしい》《おもしろい》を肯定するものが多かった。一方、通話との関係では、祖母と電話で話す機会が多いものほどネガティブな項目である《つまらない》を否定する傾向がみられた。全体的に接触頻度が高くなるほどポジティブなイメージを抱く傾向がみられた。また、深谷ら(1982・1983)は、祖父母が遠隔地に住むほど、子どもからポジティブなイメージがもたれると述べている。本研究では同居している幼児の方が、祖母に対して、ポジティブなイメージを肯定していることが示され、深谷らの調査結果と異なっている。

対人感情を示す「すき」とイメージの関係については、祖母を「すき」と肯定するものほど、すべてポジティブな祖母イメージ項目を肯定し、ネガティブなイメージの項目は、すべて

幼児の老人観 (1)

否定的であった。つまり、祖母を「すき」という感情が、《やさしい・おもしろい・きれいな》というイメージと《こわい・がんこな・つまらない》というイメージが、相反することによって強められていることが示唆される。

性差については、ほとんどの祖母イメージ項目において有意な差は、見られなかったが、《やさしい》というポジティブなイメージを肯定する傾向が女兒にみられた。深谷ら (1983) が、児童を対象とした報告で、男子より女子の方が老人を好意的に捉える傾向があることを指摘しているが、本研究の結果も深谷らと同様の傾向がみられた。このことは、女兒の方が男児に比べて老人をよりポジティブで好意的に認知している傾向が、幼児から児童までの発達過程において見られることを示していると考えられる。

また、祖母との同・別居によるイメージの差は、《きれいな》と《おもしろい》というポジティブな項目において有意な差がみられた。同居の祖母のイメージは、別居の祖母に比べて、特に《きれいな》といった外見上の特徴についてよいイメージをもっているといえる。また内面的な特徴である《おもしろい》という面も同居の祖母から感じとっているといえる。

表6 祖母イメージと諸要因との関係

祖母イメージ		別居祖母との接触頻度												性別		同・別居		すき			
		接触日数			訪問			外出			通話			男	女	同居	別居	ぴったり	まあそう	思わない	
		0 10日	11 29日	30 365日	よくある	ときどき	ない	よくある	ときどき	ない	よくある	ときどき	ない	男	女	同居	別居	ぴったり	まあそう	思わない	
やさしい	肯定	27	27	27	24	56	0	32	45	3	39	40	1	37	50	7	80	72	13	0	
	やや肯定	26	29	19	20	55	0	20	42	10	26	46	2	50	33	+	9	75	33	52	1
	否定	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	1	1	1	1	0	1	1	
きれいな	肯定	4	5	5	6	8	0	7	6	2	6	7	1	7	13	6	14	16	3	1	
	やや肯定	37	40	36	34	79	0	35	69	7	47	64	2	66	56	10	103	80	44	0	
	否定	11	12	4	4	25	0	8	13	5	10	16	0	14	14	1	29	7	19	1	
おもしろい	肯定	6	8	6	6	16	0	12	9	1	11	9	1	14	14	6	22	25	3	0	
	やや肯定	35	41	31	30	77	0	34	67	4	42	63	2	60	55	8	107	69	49	0	
	否定	12	8	7	8	19	0	6	13	7	12	15	0	14	15	3	27	11	14	2	
こわい	肯定	1	1	1	2	4	0	0	3	0	1	2	0	2	1	0	3	2	1	0	
	やや肯定	3	7	4	4	10	0	3	11	0	7	7	0	9	8	3	14	5	10	1	
	否定	49	49	41	38	101	0	49	75	12	57	78	3	76	76	14	139	97	55	1	
がんこな	肯定	0	1	1	2	0	0	1	1	0	1	1	0	2	1	1	2	2	0	1	
	やや肯定	4	10	4	3	15	0	6	9	3	6	11	1	12	9	3	18	7	13	1	
	否定	49	46	41	39	97	0	45	80	9	58	75	2	74	74	13	136	96	53	0	
つまらない	肯定	0	1	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1	1	0	0	
	やや肯定	3	2	0	1	4	0	0	3	2	1	3	1	4	3	2	5	0	6	1	
	否定	50	52	46	43	107	0	52	85	10	63	84	2	84	85	15	150	104	60	1	

+ p < 0.1 * p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

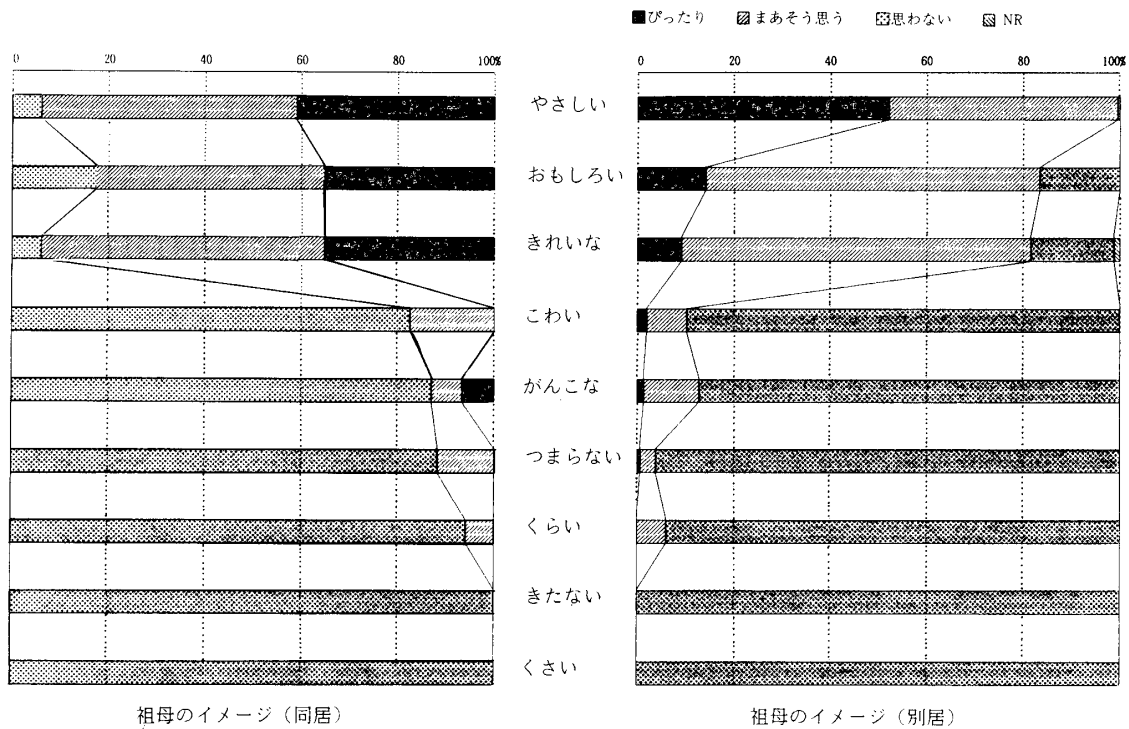


図2 祖母のイメージ (同・別居別)

調 査 II

目 的

幼児の老人観に関する知見を得るために、調査Ⅰでは、幼児にとって最も身近な老人である祖母とのつながりや幼児の抱いている祖母イメージについて検討した。調査Ⅱでは、幼児が抱いている老人像についての基礎資料を得ることを目的とした。老人の特性を示す側面としては、身体的側面、精神的側面、社会的側面が考えられる。ここでは、幼児を対象とするため外見上に表れる身体的側面の老人的特徴から、幼児がどのように老人像を認知しているのかを探った。

方 法

個人面接により調査した。(面接者は筆者2名、場所は各園内の1室)

調査時期 1989年8月

調査対象者 調査Ⅰのうち、面接調査を実施できた4, 5歳児36名(同居男児9名, 同居女児8名, 別居男児8名, 別居女児11名)。

手 続 き 幼児の場合、概念を言語で適切に表現することは難しいため、ここでは、老人の特徴を含んだ複数の図版を示し、幼児に老人と思うものの選択を求めるとした。幼児が選択した図版に含まれている老人的特徴から、幼児が老人であると感じる手がかりがどこにあるのかを探ろうとした。

図版に示す老人的特徴は、先行研究(井上1980)及び、予備調査から見出された老人についての外見的特徴6項目(表7)を取り上げた。6項目のあらゆる組合

幼児の老人観 (1)

せを行なうと64種類の組合せが考えられるが、ここでは、その中で3項目が老人的であり、残り3項目が非-老人的となっている組合せの外見的特徴を持った女性像を描いた図版(210mm×148mm)を20枚作成した。その構成の一覧を表9左側に示す。面接では20枚の図版を10枚ずつ2回に分けて幼児の前に呈示し、「おばあさん」と思う図版の選択を個別面接により求めた。

なお、一般的な老人(女性)について尋ねているのであり、幼児自身の祖母ではないことを考慮して、教示は以下のように行った。

[教示]「女の人には、「おねえさん」という人と、「おばさん」という人と、それから「おばあさん」という人がありますね。(図版を並べながら)この絵の中で○○ちゃん(くん)がおばあさんだと思う絵はどれかな?いくつでもいいから教えてね。」

表7 老人の外見的特徴を示す6項目

外見的特徴	姿 勢	顔のしわ	髪色	髪型	服装	服の色
老人的	腰が曲がっている	あり	白髪	まげ	和装	茶色
非-老人的	直立している	なし	黒髪	パーマ	洋装	桃色

結果と考察

幼児が選択した図版について、選択数と選択傾向に分けて以下に述べる。

1) 選択数

表8は、幼児が20枚の図版の中で老人として選択した図版の数を、祖母と同居している幼児(同居群)と祖母と別居している幼児(別居群)に別けたものと、男児・女児別に示したものである。

被験児一人が20枚の図版の中から選択する数は、0枚から20枚まで考えられる。実際に、「おばあさんは一人も(20枚の図版の中に)いない」として選択数0の幼児もあり、逆に「全部そうだと思う」という選択数20の幼児もあった。

まず、同居群と別居群について、選択した平均枚数をみると、同居群は平均値が5.18、別居群が9.84であり、差がみられた($t=3.07, df=34, p<0.01$)。祖母と別居している幼児の方が老人的特徴を含む図版を選択した枚数が有意に多いということは、同居している幼児に比べて自分なりの老人に対する概念をはっきりと形成できておらずあいまいで、老人像が明確にされていないことが考えられる。逆に、同居群の幼児は祖母の姿を通して独自の老人象をを抱きやすくなっていると推察される。しかし、幼児のもつ老人像に実際の祖母像がどのように反映されているかは、今回得られた資料からは検討することはできなかった。

一方、男女間では選択した枚数には、差はなかった。老人的特徴の把握の程度に性差はないことを示す結果となった。

表8 各幼児の図版選択枚数

選択数	0~5	6~10	11~15	16~20	N	\bar{X}	SD	t
同居	7	4	5	1	17	5.18	3.78	**
別居	7	7	3	2	19	9.84	4.93	
男児	10	5	2	0	17	7.41	5.03	
女児	4	6	6	3	19	7.84	4.97	
計	14	11	8	3	36	7.64	5.00	

2) 選択傾向

表9は、各図版別に含まれている老人的特徴と、それらを選択した幼児の人数を示した。図3, 4には、幼児が選択した図版に含まれた老人的特徴の項目の比率を、男女別、同・別居別に表して傾向をみた。

図版別の選択数をみると、No. 2, 4, 7, 8, 10の図版が選択された回数が多く、それらの含む共通した老人的特徴は姿勢であり、選択数の少ない図版はNo. 12, 13, 15, 17, 18, 19であった。これらに含まれた共通の外見的特徴は、『姿勢』の項目で非一老人的であり、『髪の色』の項目が老人的(白髪)であった。

外見的特徴別に得点をみると、『姿勢』が最も高く、『髪の色』が最も低く、その他は同程度の得点であった。老人像の選択に際して、『姿勢』が老人的であることが、最も影響を与えており、『髪の色』が白髪であるかどうかは、あまり影響なく、その他の項目は同程度に影響を与えているといえる。これらを同居群と別居群でみると特に違いはなく、祖母と同居しているか別居しているかということは、幼児の抱く老人像の特徴に違いを生じさせる要因にはならないことを示している。一方、男児と女児の比較では、外見的な特徴の中で『姿勢』や『衣服の色』の項目が老人的なものを、男児の方が多く選択していた。『姿勢』や『衣服の色』の項目は、老人の外見的特徴を示す項目の中で、他の項目に較べて、より全体的な特徴について示すものであり、男児は、女児に比べて体の全体像から老人の特徴をイメージしているものと推察される。

以上のことから、幼児が老人の特徴を認知する際、男児は女児に比べて全体的な要因に影響を受けていること、祖母との同居群の方が別居群に較べて判断の基準が明確になっていること、しかし、その基準としている要因の傾向には両群に違いがないことが示された。

表9 各図版の選択数及び特徴別得点 ● … 老人的特徴
 - … 非老人的特徴

図版 No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	特徴別得点 (得点率%)	
外見的特徴	姿勢	●	●	●	●	●	●	●	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	169 (61.5)	
	しわ	●	●	●	●	-	-	-	-	-	●	●	●	●	●	●	-	-	-	-	136 (49.4)	
	髪	●	-	-	-	●	●	●	-	-	-	●	●	●	-	-	-	●	●	●	-	120 (43.6)
	髪型	-	●	-	-	●	-	-	●	●	-	●	-	-	●	●	-	●	●	-	●	134 (48.7)
	服装	-	-	●	-	-	●	-	●	-	●	-	●	-	●	-	●	●	-	●	●	133 (48.4)
	服・色	-	-	-	●	-	-	●	-	●	●	-	-	●	-	●	●	-	●	●	●	133 (48.4)
選択数	17	19	14	18	12	14	19	20	16	20	14	8	10	14	10	12	10	7	9	12	275 (計)	

* ●を1点、-を0点とし、[●×選択数の和]が得点になる
 ** 各図版に●は3つずつあるので、総得点は選択数×3になる

幼児の老人観 (1)

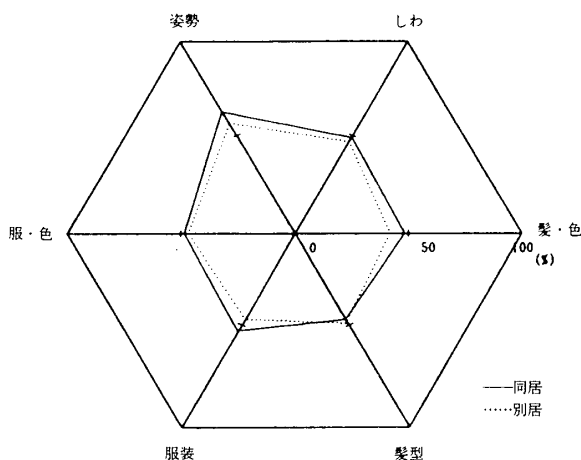


図3 老人的特徴別得点率 (同・別居別)

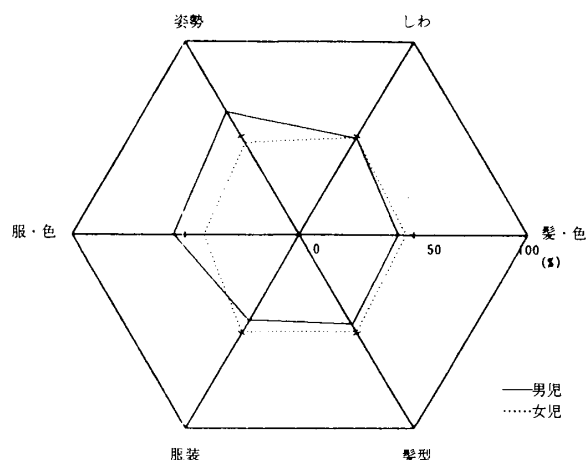


図4 老人的特徴別得点率 (性別)

要 約

幼児の老人観を、幼児と祖母の接触、祖母イメージについて、アンケート及び、面接調査より検討した結果、次のようにまとめることができた。

- 1) 幼児と別居祖母との接触は、全体に多い傾向にあり、電話によることばを通したコミュニケーションが最も多く、祖母自身と幼児との内面的なつながりが重要であることが示された。
- 2) 幼児の抱く祖母イメージは、ポジティブなイメージが肯定され、ネガティブなイメージが否定される傾向にあり、祖母への対人感情は全体的に好意的であった。
- 3) 祖母イメージを規定する要因を性差、同・別居別、接触量、好きか嫌いかという点について検討した結果、女兒にやや好意的な傾向がみられ、同居群が、外見上の特徴を重要視しており、一方、別居群では内面的な特徴を強くイメージしていた。また、接触量が多い程、イメージはポジティブな傾向にあった。
- 4) 幼児の抱く老人像は、祖母と別居している幼児の場合、同居している幼児に比べ老人像が明確になっていいることが指摘された。男児は女兒に較べて全体的な特徴をとらえて判断する傾向がみられた。

引用・参考文献

- ① 安藤貞雄 1974 幼稚園教諭の老人観について 盛岡短期大学研究報告 25, 83-90
- ② 保坂久美子・袖井孝子 1986 大学生の老人観 老年社会科学 8, 103-116
- ③ 保坂久美子・袖井孝子 1986 大学生の老人イメージ 社会老年学27, 22-33
- ④ 深谷和子・山上和子 1982 子どもの老人観1 東京学芸大学紀要 第1部門 33, 229-241
- ⑤ 深谷和子・金子純江・中村万里子 1983 子どもの老人観2 東京学芸大学紀要 第1部門34, 203-214
- ⑥ 井上勝也 1980 老人の心理と行動 井上勝也・長嶋紀一(編) 老年心理学 朝倉書店135-136,

198-199

- ⑦ 宮崎昭夫・久留島京子・松田淳之助・田路 慧・山本清洋 1976 老人問題に関する意識構造の研究(Ⅱ) 岡山県立短期大学研究紀要20, 107-114
- ⑧ 守屋国光 1974 女子短大生の老年像 目白学園女子短期大学研究紀要11, 83-90
- ⑨ 村井隆重 1981 孫に好かれる知恵 ミネルヴァ書房
- ⑩ 塚本 哲 1978 老人と子ども ミネルヴァ書房
- ⑪ 内山道明他 1989 高齢者の心理的特性と社会適応 厚生省厚生科学研究費補助金 シルバーサイエンス研究昭和63年度報告書 208-209
- ⑫ 内山道明他 1990 高齢者の心理的特性と社会適応 厚生省厚生科学研究費補助金 シルバーサイエンス研究平成元年度報告書 227-228

付 記

調査Ⅰは、東海心理学会第38回大会(1989)での口頭発表(「祖父母と孫のコミュニケーション」吉村・三輪・望月)に若干データを加え、まとめたものである。

本研究は、平成元年度厚生省厚生科学研究補助をうけたものの一部である。

調査にあたり、快くご協力下さった各園の先生方、園児の皆さん、父母の皆さんに御礼申し上げます。

また、この研究にあたり、内山道明教授、三輪弘道教授にご指導・ご助言を頂いたことをここに記し深く感謝申し上げます。